

前回講演会まとめ

イスラームにおける主体性の錯綜 - 「シャルリ・エブド事件」から考えるべきこと

鵜飼 哲（一橋大学教授）

2015年1月7日にフランスの首都パリで起きた風刺新聞社襲撃事件は、この惨劇に至る過程を含め、きわめて複雑な出来事であった。「表現の自由」を原則とする近代的、民主的な社会と、それに敵対する前近代的な宗教共同体思想の激突などという安易な図式では、到底その本質をつかむことはできない。

この事件を正確に理解するためには、一方でフランス共和制と「宗教」の特異な諸関係が「非宗教性」(laïcité) という概念の再検討を通して再考されなければならないし、他方ではイスラームという信仰共同体について内在的かつ歴史的な認識が求められる。ここではイスラームの側に焦点を絞り、チュニジア出身の精神分析家フェティ・ベンスラーマの仕事を中心に参照しつつ、基本的な論点の整理を試みる。

事件の数ヶ月前に出版された『イスラームにおける主体性の戦争』に至るベンスラーマの仕事は、イスラームの起源に関する精神分析的解釈を軸に、現代のアラブ＝イスラーム世界の動向に積極的な介入を試みてきた。その特徴は「理論」としての精神分析を「対象」としてのイスラームに単純に適用するのではなく、ユダヤ＝キリスト教的出自をもつ精神分析とイスラームを、相互的な試練にかける独自のアプローチにある。

ベンスラーマによれば、「宗教原理主義」と規定される現代イスラーム世界の信仰生活の変容は、ある社会の創設的行為の忘却に起因する居心地の悪さへのひとつの応答として理解すべきものである。西洋諸国の植民地支配、政治的独立、そして近代化の波に洗われるなかで、イスラーム世界はその信仰的基

盤の喪失という社会的感情に襲われた。そのとき、起源への原義的回帰の欲望が現れる。それは聖典(『クルアーン』)の直解的解釈によって、預言者在世中の純粋なイスラームを回復しようとする欲望であり、預言者没後の歴史のすべてを否定しようとする傾向を持つ。

このような動向には歴史的必然性があり、そのメカニズムを正確に理解しなければならない。ベンスラーマによれば、このような起源への原義的回帰の欲望には、起源への転義的回帰の可能性を示すことによって応じる必要がある。それは信仰共同体の創設的行為を、歴史の進展に応じて新たな可知性のなかに書き込み直し、そのことによって記憶を新たな生成に向けて解放することである。西暦7世紀に成立したイスラームはアブラハム一神教のなかで最後に誕生した世界宗教であり、その起源に関する記録は豊富に存在する。イスラームの起源とは、ユダヤ教、キリスト教など先行する一神教の創設神話の独創的な解釈による反復にほかならず、起源への転義的回帰は、このような起源の経験を反復することでもある。

初期のベンスラーマの仕事は、フロイトによるイスラームについての短い言及の含意の検討をひとつの柱にしていた。『人間モーセと一神教』のある注でフロイトは、「イスラームはユダヤ教の短縮化された反復」であるが、「創設者の殺害が起きなかったことが急速な文明的発展を可能にし、またそれを中断もした」と断じている。このフロイト説に対してベンスラーマは、「<一>であり、欠けるところなく、生みもせず生まれもしない」(『クルアーン』、112章1-4節)と言われるように、イスラームにおいて神の名は、生殖=家族的隠喩系から殊更に断絶しており、預言者もまた、信徒たちの<父>とはみなされないという点を強調する。

また、聖書・創世記のアブラハムによるハガルとイシュマエルの追放はアラブ民族の起源譚でもある。ベンスラーマはこの「起源の離縁」の説話を重視し、事実上の神の子であるイサクからイエスへ、男子の「霊による誕生」の系譜がたどられるユダヤ=キリスト教に対し、イシュマエルが「肉による誕生」であることを重視する。そして、創世記の登場人物のなかで母のハガルのみが『クルアーン』に不在であるという事実、「イスラームの制度はそれを一神教の記憶に系譜的に節合する端緒となる女性の否認のうえに成立した」ことを読み取っている。

イスラームには伝統的に主体性の問いがあった。ギリシャ哲学の<ヒュポケイメノン>は、イスラームのなかに、哲学的な「基体」と神学的な「従属」に分岐しつつ継承された。また、イブン・アラビーの『叡智の台座』には「その重力の中心が<他者>の欲望である主体」が素描されており、ラカン派精神分析で言うところの無意識の主体に近い発想が見出される。

しかし、19世紀以降の啓蒙主義的西洋による征服・植民地支配は、イスラームの核心に、文明的「基軸の歴史的破砕」と呼ぶべき外傷をもたらした。それは「時間、知、真理、主権、享樂といった基本的関係をめぐる分岐のプロセスの結果として、共通の基体がさまざまに分離」していく危機的な状況である。

ナポレオンのエジプト遠征以降、西洋的近代のイスラーム世界への導入を図る啓蒙派の知識人運動が起こる。この潮流はイスラーム的理想を堅持しようとしたが、結果的に生じたのは共同体的実体からの主体の分離であり、脱同一化であった。だが、やがて西洋による植民地支配が啓蒙的理想の裏切りであることを見て取ったイスラーム知識層は、伝統への回帰の道を取るようになる。しかし、このような共同体的理想との再同一化が不可能であるがゆえに、超自我による主体の問責の機制が発達していく。また、民衆のイスラームは理解不可能な事態に直面し、共同体の自我の防衛を求めて返って自己を毀損す

ることになる、「自己免疫的待望」の体制を取る。

啓蒙主義に対するこのような反動が伝統の固守、伝統への回帰を目指したのに対し、ベンスラーマが「反啓蒙」(anti-Lumières)と呼ぶ潮流は、イスラーム的伝統のなかの合理主義的遺産とのラディカルな断絶を唱えることになる。それはアラブ哲学の思弁と断絶し、さらには聖典の神学的解釈までも拒否するに至る。トルコのムスタファ・ケマルによるカリフ制の廃止(1924)に対する反応として、1929年エジプトにムスリム同胞団が結成される。1960年代のその有力な思想的指導者であったサイイド・クトゥブは、『クルアーン』に含まれる絶対的理性以外の中立的な理性を認めず、「少しでも哲学が入るとイスラームの純粋な源泉に毒が盛られる」と主張した。ここで起きている事態は、ベンスラーマによれば、共同体の理想への「脱同一化でも再同一化でもなく、共同体の超自我への超同一化」なのである。

聖戦主義と呼ばれる<殉教>思想は、独立戦争、脱植民地化過程を含め、イスラームの歴史上前例がないものであり、1980年代以降急速に発展した。この思想を駆動させているものはまさにこの「共同体の超自我への超同一化」であり、宗教原理主義の暴力の巨大さは、超自我に固有の残酷さにその源泉がある。「シャルリ・エブド」事件についても、このことの認識抜きに「テロリズム」を非難するだけでは、適切な対応を取ることはできない。とはいえ、イスラーム世界のなかにはこれとは別の主体性の形成の萌芽も観察される。2011年初頭からの「アラブの春」の参加者が尊厳と正義の要求を掲げたとき、そこに神、宗教、導き手といった古来の名は不在だったのである。